

『龍谿王先生全集』卷一三 訳注（五）

二松学舎大学宋明資料輪読会王龍溪班
田中正樹・山路裕・佐々木正清

【凡例】

- 一 本訳注は、王畿『龍谿王先生全集』卷十三（序類）の訳注である。
- 二 底本は万曆十六年蕭良幹刊『龍谿王先生全集』二十卷（四庫全書存目叢書所収）を用いる。校勘には、万曆四十七年丁賓刊『龍谿王先生全集』二十二卷（国立公文書館所蔵）を用い、注記の際は「重刊丁賓本」の略称を用いた。
- 三 本稿の構成は【原文】【校勘】【訓読訳】【現代語訳】【語釈】の順に構成される。なお、必要があつて補説や資料を加える際には【語釈】のあとに加えることにした。
- 四 原文には、語釈に対応する番号を右傍に附することにした。また、文意や理解を助けるために訳者が補った言葉は（ ）で示した。

【精選史記漢書序】^① 序

【原文】

嘗聞之、古文之與時文、其體裁相去若甚遠、而其間同異之機、不能以寸。要皆於虛明一竅發之、非明者莫能辨也。故曰、

「師其意、不師其辭」。^④吾有取焉爾。讀者悟夫作者之意、而不失其用虛稽實、紆徐縱閉變化之態、時文猶古文也。不得其意而徒辭之徇、句句而研之、字字而校之、摸擬摘實、如優人之學孫叔敖、^⑤適足以來明者之一噓而已。

予友荊川子嘗讀『史』・『漢書』、取其體裁之精且變者數十篇、批抹點裁、以為藝文之則。^⑥夫子長法『國語』・『左傳』、孟堅法『史記』、固也。然其文皆自為機軸、而不相沿襲、殆師其意者非耶。^⑦子長之文博而肆、孟堅之文率而整。方之武事、子長如老將用兵、縱橫蕩恣、若不可羈、而自中於律。孟堅則遊奇布置、不爽尺寸、而部勒雍容、密而不煩、制而不迫、有儒將之風焉。要之、子長得其大、孟堅得其精、皆古文絕藝也。荊川子是編、自謂深得班馬之髓、而於『漢書』尤精、蓋所謂得其竅者也。

昔有關中士人嘗持所作、請證於陽明先師。先師謂曰、「某篇似『繫辭』、某篇似『周詁』、某篇似『檀弓』、某篇絕似『穀梁』」。其人甚喜、因諭之曰、「十歲童子作老人相、拄杖曳履、咳唾僂僂、非不儼然似也。而見者笑之。何者、以其非真老人也。苟使童子飭衿肅履、拱立以介乎其間、人自竦然、不敢以幼忽之。何者、以其真童子也」。嘗以語荊川子、荊川深領之、謂可以為作文者之法。且夫天下萬事、未有不從虛明一竅中出而能得其精者也。因述所聞、而為之序其端。

【校勘記】

異同なし。

なお本序文は、原序が国立公文書館所蔵『荊川先生精選批点史記』にも収められている。そこで参考に資するため原序との異同を左に示す。

- ・精選史記漢書序 原序は「荊川批點精選史漢書序」に作る。
- ・模擬摘實 原序は「模擬摘拾」に作る。
- ・批抹點裁 原序は「批抹點截」に作る。
- ・於『漢書』尤精蓋 原序はこの後に「荊川子邃於時文而復悟通於古文」とあり。
- ・請證於陽明先師 原序は「陽明」の二字なし。
- ・因論之曰 原序は「因論之曰」に作る。
- ・以其非真老人也 原序は「以非其真老人也」に作る。
- ・嘗以語荊川子 原序は「嘗以語於荊川子」に作る。
- ・能得其精者也 原序はこの後に「督府梅林公取刻是編以示學者而屬言於予姑述其所聞若是人見公揮戈講藝若爲二事而不知鑑別兩家之奇正如辨蒼素有深慨焉固妙悟兵機之遺也學者能于古文悟通於時文且默識所謂虛明一竅爲何物則可以進於藝矣此固公所欲示之微意也 山陰龍溪王畿書」とあり。

【訓読文】

嘗て之れを聞く、古文と時文とは、其の體裁 相ひ去ること甚だ遠きが若きも、而も其の間の同異の機は、寸を以てする能はず。要は皆な虚明一竅に於いて之れを發するにて、明ある者に非ずんば能く辨ずること莫きなり。故に曰はく、「其の意を師として、其の辭を師とせず」と。吾れ焉に取ること有るのみ。讀む者 夫の作者の意を悟りて、其の虚を用ひて實を稽へ、紆徐縦閉の變化の態を失はずんば、時文も猶ほ古文のごときなり。其の意を得ずして徒らに辭にのみ之れ徇しんがひ、

句句にして之れを研ぎ、字字にして之れを校^くべ、模擬して實を摘ること、優人の孫叔敖を學ぶが如きは、適に以て明ある者の一嚟を來すに足るのみ。

予の友荊川子嘗て『史』・『漢書』を讀みて、其の體裁の精にして且つ變なる者數十篇を取り、批抹點裁し、以て藝文の則と爲す。夫れ子長の『國語』・『左傳』に法り、孟堅の『史記』に法るは、固^{まこと}なり。然れども其の文は皆な自ら機軸を爲して、相ひ沿襲せざるは、殆ど其の意を師とする者か非なるや。子長の文は博にして肆、孟堅の文は率にして整。之れを武事に方^くぶれば、子長は老将の兵を用ふるが如く、縱橫蕩恣にして、羈^かす可からざるも、而も自^{おのづか}ら律に中^{あた}るが若し。孟堅は則ち遊奇の布置も、尺寸に爽^{たが}はざるに、而も部勒雍容たりて、密にして煩ならず、制して迫らず、儒將の風有り。之れを要するに、子長は其の大を得、孟堅は其の精を得るにて、皆な古文の絶藝なり。荊川子の是の編は、自ら深く班・馬の髓を得て、『漢書』に於いて尤も精しと謂へるは、蓋し所謂ゆる其の竅を得る者ならん。

昔關中の士人嘗て作る所を持し、證を陽明先師に請ふ有り。先師謂ひて曰はく、「某篇は「繫辭」に似、某篇は「周誥」に似、某篇は「檀弓」に似、某篇は絶えて「穀梁」に似たり」と。其の人甚だ喜べば、因りて之れを論して曰はく、「十歳の童子老人の相を作して、杖を掛け履を曳き、咳唾僂僂なるは、儼然として似ざるに非ず。而るに見る者之れを笑ふ。何となれば、其の眞の老人に非ざるを以てなり。苟^も使し童子衿を飭へ履を肅へ、拱立して以て其の間に介すれば、人自^{おのづか}ら竦然たりて、敢へて幼を以て之れを忽せにせず。何となれば、其の眞の童子なるを以てなり」と。嘗て以て荊川子に語れば、荊川深く之れを領し、以て文を作る者の法と爲す可しと謂ふ。且つ夫れ天下の萬事、未だ虚明竅中より出でずして能く其の精を得る者有らざるなり。因りて聞く所を述べて、之れが為に其の端に序す。

【現代語訳】

かつて次のように聞いたことがある。古文と時文は、その体裁の違いは非常に大きいように見えても、実際その両者間に存する相異のおもとは、すこしも離れているものではない。要は、すべて混じり気のない心から発現するものであって、高明な人でなければ見分けることはできない。だから韓愈は曰うのである、「その内容を先生とするのであって、その表現を先生とするのではない」と。私はこの言葉に感じ入ることがあった。文章を読む者がその作者の意図をよく理解して、虚によって実を比較検討し、（文章構成上）遠回しに述べたり抑揚をつけるといった変化の実態を保持していれば、時文も（文章の素晴らしさにかけては）古文のようなものである。その内容をつかまずに、ただいたずらに表現にのみこだわって、一句一句について彫琢をこらし、一字一字について比べ、模倣して実情をつかみ取ろうとすることは、あたかも俳優が孫叔敖の所作を学ぶようなもので、高明な者に大笑いされても仕方ない。

私の友人である荊川さんは、かつて『史記』・『漢書』を読んだ折、その文章の体裁の内、精密でありながら変格である数十篇を選び、評語を加えつつ校訂し、点をつけ線を引くことにより、文章表現の模範たることを示した。いったい子長が『国語』・『左伝』を参考にし、孟堅が『史記』を参考にしたことは、いかにもその通りである。しかしながら、彼らの文がどちらも独自の風格をもち、そのまま踏襲しなかったのは、ほとんどその内容を先生とするものではあるまいか。子長の文は雄大で伸びやかであり、孟堅の文は素直で整っている。このことを軍事のことに比べてみると、子長の文は、老将が軍隊を自由で思うがままに動かすように、一見制御できていないように見えるが、自然と規範にあたっている。孟堅の文は（用兵における）遊兵と奇兵の配置の仕方までもが、ぴったり規範に合致しているながらも、その配置の仕方には余裕があり、緻密でありながら煩わしくなく、統制がとれていながら息苦しくなく、儒將の趣があるといえる。要するに、子

長はその壮大なものを体得し、孟堅はその精粹なものを体得したのであって、いずれも古文の最高傑作である。荊川さんはこの編について、深く班固・司馬遷の核心を得て、『漢書』には特に精通し得たと自分で思えるのは、さきほど述べた（混じり気のない）心を得た者だからではなからうか。

昔、関中の士人がみずから作った文章を持つてきて、それに対する評価を陽明先師に請うたことがあった。先師は、「その篇は『繫辭』の文に似ており、その篇は『周誥』に似ており、その篇は『檀弓』に似ており、その篇はまるで『穀梁』のようだ」とおっしゃった。（すると）その人があまりに喜ぶので、論して曰うには、「十歳の童子が老人の身なりをして、杖をかけて（？）履をひきずり、せきをしたり痰を吐いたり、腰を曲げるさまは、まるで実物そっくりで似ていないわけではない。しかし見る者はそうした姿を笑うものだ。どうしてかといえば、それは本当の老人ではないからである。もし童子が衿を正し履き物をしっかり履き、拱立してその間に立っていれば、それを見る人は自然と畏敬の念を覚えて、幼いからといってぞんざいな扱いはしない。なぜかといえば、それこそが真の童子の姿だからである」と。このことをかつて荊川さんに語った際、荊川は深く頷き、文を作る者にとつての箴言とすべきだと述べた。なおかつ、天下のあらゆることであっても、混じり気のない心に基づかずに物事の精粹を得ることのできたためしはない。そこで聞いたことを述べて、荊川のために篇の端に序文を書きつけることにする。

【語釈】

①精選史記漢書：唐荊川撰。北京・国家図書館およびアメリカ議会図書館には、万曆十二年重刻本の『精選史記』十二卷、『精選漢書』六巻が所蔵されるが、重刻本には王畿の序文は収められず、毛在の「重刻唐荊川精選史記漢書序」が収め

られる。日本・国立公文書館には『荊川先生精選批点史記』四冊が所蔵され、こちらには王畿の原序が収められる。

②古文之與時文：「古文」は漢以前の文章のこと。魏晉南北朝時代に流行した美文である四・六駢麗文に対して言う。唐代の韓愈や柳宗元らは、当時通行していた駢麗体による文章から漢以前の古文体にもどるべきことを説いた。明代においては、李夢陽ら「古文辞派」が秦漢の文章を尊重したのに対し、唐順之や王慎中らいわゆる唐宋派は、唐宋における古文復興者の文章をも尊重した。「時文」は、科挙試験の回答に用いられる文体。明・清の時代では「八股文」がそれにあたり、対句によって四書五経の意味について論じるもの。

③虚明：心になんら混じり気がないことを形容する語。王畿が頻繁に用いる語である。たとえば「留都會紀」に、「孟子願學孔子、提出良知示人、又以夜氣虚明發明宗要、只此一點虚明便是入聖之機、時時保任此一點虚明、不為日晝梏亡、便是致知」とあり、また「苟情存養生一念、志便有礙、便不神。子能打破此一關、胸次便自虚明、氣象便是廣大、一體靄然、動與天游、方是久大之德業也」とある。なお、王畿には「作文」の要諦を述べた語として次のようなものがある。龍溪謂遵巖曰、「古人作文全在用虚、古今好文字足以有傳、未有不從圓明一竅中發者。行乎所當行、止乎不得不止、

一毫意見不得而増減焉。只此是作文之法、只此是學」(『龍溪王先生會語』卷二「三山麗澤録」)。

④師其意、不師其辭：唐の韓愈の言葉。「答劉正夫書」に、「有來問者、不敢不以誠答。或問「爲文宜何師」。必謹對曰、「宜師古聖賢人」。曰、「古聖賢人所爲書具存、辭皆不同。宜何師」。必謹對曰、「師其意、不師其辭」とある。

⑤不失其用虚稽實、紆徐縱閉變化之態、時文猶古文也：はじめの二句はよく分らない。「虚」・「實」「紆徐」「縱閉」などの術語は、科挙の答案試験を射程に含む文論に見える。なお当該句に近い表現として、『龍谿王先生全集』卷八「天心題壁」には次のようにある。

凡讀書在得其精華。不以記誦爲工、師其意、不師其辭、乃是作文要法。古人作文、全在用虛。紆徐操縱、開闔變化、皆從虛生。行乎所當行、止乎所不得不止、此是天然節奏、古文時文皆然。

「虚」・「實」のとりわけ「虚」については、序文前文に見える「虚明」の語を踏まえて、「虚」なるありかたによって内容面の「實」を考えることを指すものと思われるが、このほかに安贊淳『明代理學家文學理論研究』（万巻楼、二〇一六年）が指摘するように、虚字（助字）と実字の用字法を指す可能性も考えられる。また、「紆徐」はおそらく文章構成が婉曲であること、展開が直線的でないこと。「縦閉」は、右に引用した王畿の「天心題壁」で言う「開闔」に相当するものであると考えられる。文論における「開闔」の語はしばしば「抑揚」の語を伴うことから（たとえば王慎中「義門序」）、これとほぼ同義であると思われる。文章上の抑揚や強弱、句づくりの長短などのことか。「縦閉」という表現は、『漢書』董仲舒伝に、「仲舒治國、以春秋災異之變、推陰陽所以錯行。故求雨、閉諸陽、縱諸陰、其止雨反是。行之一國、未嘗不得所欲」とあり、董仲舒『春秋繁露』の「求雨」篇には「開陰閉陽」、「止雨」篇には「開陽而閉陰」とある。

⑥ 優人之學孫叔敖：『史記』滑稽伝に記される春秋戰国時代の楚の令尹・孫叔敖と、同じく楚人で藝人の優孟との逸話を踏まえる。いわゆる「優孟衣冠」であり、外見は似ていても実態は異なることのたとえ。

⑦ 子長法『國語』・『左傳』、孟堅法『史記』：「子長」は、『史記』を著した司馬遷の『史記』が『國語』と『左傳』とを踏まえていることは、『漢書』司馬遷傳の贊に「司馬遷據『左氏』・『國語』とある。『孟堅』は、『漢書』を著した班固の字。

⑧ 子長之文博而肆々皆古文絶藝也：明代の凌稚隆『史記評林』「讀史総評」中に引くその父・凌約言の言葉に、「子長之文豪、如老将用兵、縱馳不可羈、而自中于律。孟堅之文整、方之武事、其遊奇布置、不爽尺寸、而部勒雍容可觀、有儒將

之風焉。雖諸家機軸變幻不同、然要皆古文絕技也」(『凌藻泉史記評抄』?)とあって、王畿の言葉に非常に類似する。なお、凌約言にはほかにも司馬遷と班固の文章を將軍になぞらえる言葉がある。『漢書評林』に引用される「班馬兩家、古今絶筆、譬之名將、子長之才、豪而不羈、李廣之射騎也。孟堅之才、膽而有體、程不識之部伍也」がそれである。

⑨「某篇似『繫辭』」～某篇絶似『穀梁』」…「繫辭」は『易經』の中的一篇。「周誥」は『書經』の中的一篇。「檀弓」は『禮記』の中的一篇。「穀梁」は春秋三伝の中の一つである『春秋穀梁傳』を指す。なお、国立公文書館蔵『荊川先生精選批点史記』では、王畿序文中の「穀梁」を「公穀」に作っており、その場合は『穀梁傳』のほか、同じく春秋三伝の一つである『春秋公羊傳』をも指す。

(二松学舎大学大学院博士後期課程 山路 裕)